SIX BOX EXHIBITION

- 6つの視点から読み解く伝統工芸 -

SIX BOX EXIHIBITHION は、伝統工芸の分野で活躍する方の作品などを6つの箱を用いて展示し、丹南地域の伝統工芸産業の魅力を紹介する取り組みです。モノだけではなく技術や環境・職人の想いなど、ひとつの面だけではなく多面的に伝統工芸を知ることによって、立体的にその魅力が浮かび上がってきます。6つのテーマをもった箱の中の展示を、さまざまな角度から、ぜひじっくりとご覧ください。

MONO CAN ものキャン

和紙の原料

楮（こうぞ）
クワ科の落葉低木、繊維の長さは7~15mm。繊維が長く良く絡み合い、強くて丈夫な和紙になります。毎年収穫できます。

三椏（みつまた）
ジンチョウゲ科の落葉低木、繊維の長さは5mm前後。光沢があり、丈夫な和紙になり、紙幣に利用されます。一年おきに枝先が3つに分かれて成長します。和紙の原料として利用できるまでに4～5年かかります。

雁皮（がんぴ）
ジンチョウゲ科の落葉低木、繊維の長さは3mm前後。光沢があり、緻密で粘りがあり、優雅さが現れる和紙になります。栽培が難しく、山中に自生しているものを採取します。和紙の原料として利用できるまでに4～5年以上かかります。

道具　コロ・竹ベラ

和紙を乾燥させる時にそれぞれ使用する道具。
越前和紙の紙の種類が様々なように、職人の手も様々。職人一人一人の手の動かし方や癖、手の馴染み方やなどが違うため自社で手作りしています。

コロ…芯にビニールレザーを巻きつけ竹で挟み、糸や針金で固定したもの。竹の部分を挟むように持ち、漉いた和紙を乾燥させるため板に密着させる時に使用します。

竹ベラ…竹を裂き削って炙ってしなやかに曲げたもの。
乾燥させた和紙を板から剥がす時に使用します。竹は程良くしなるので何年と使っていくうちに手に馴染み、より使いやすくなります。

干支色紙

新年を迎える縁起物の色紙。
主な工程は、楮を主原料にネリ（トロロアオイの粘液）を加え「流し漉き」をした地紙（ベースとなる紙のこと）を漉く。別の場所で、図案に合わせて作った金型を紗の上に置きそれぞれの場所に染色された三椏や雁皮を流し込んで図柄を作る、この技法を「流し込み」といいます。三椏の紙料をその枠にくっつけて紗の上に写し取る「引っ掛け」。越前和紙の技術の一つ「引っ掛け」は伝統的な柄や縁起物などの模様が多く使われています。
干支色紙は小さいながらも越前和紙の漉き模様の技術が詰め込まれています。

nenne シリーズ「sumica」と「madoca」

北陸の方言でネンネは赤子。または親戚や身内の子供という意味。
親しみやすく誰からも可愛がってもらえるように。親から子へ、次の世代へも繋がってゆけるブランドを目指しています。
sumica（すみか）…最初に作ったのが大きな白いバラ。花言葉は純粋、無垢、まっさら。「なんでもない日の自分を切り替えるようにまっさらに」という気持ちを込めて。
結婚式の髪飾りにはオーダーメイド製作もしています。
madoca（まどか）…意味は「丸い」やリサイクルから。本来なら商品にはならない和紙に手を加えてアクセサリーに仕上げました。

harukami [moln]

harukamiは若手デザイナーとの生まれたシリーズ商品。1500年の歴史を誇る越前和紙の新しい挑戦のひとつ。手漉き和紙特有のやさしい風合いでありながらも立体的で強度もあり丈夫。

moln（モルン）とはスウェーデン語で「雲」のこと。空に浮かぶフワフワの雲のような自然なカタチ、雲のように軽い和紙の箱です。一枚一枚漉いた和紙を手で包み込むように型に貼り付け、温かみのあるやわらかなカタチに仕上げています。和紙の自然な色合いに蛍光色のゴムの組み合わせに和風だけでないモダンなデザインが施されています。

harukami [cobble]

cobble（コブル）とはスウェーデン語で「石」のこと。
襖紙と同じ程の丈夫さでやさしい風合いの和紙の箱。河原に転がっている小石のような、自然でやわらかな丸みを持ったカタチは積み重ねたり、並べてみたり。もしくはただそこに置かれているだけでも、暮らしの空間に心地良く存在します。

有限会社
やなせ和紙

柳瀬 晴夫

Haruo Yanase

人々の日々の暮らしの中から消えつつある和紙を、一つは家庭内にあるモノにしていきたいと努力している毎日です。また、日本の伝統工芸の技術とデザイナーとのマッチングで海外でも販売できる商品を創ろうと取り組み始めた「harukami」。各方面の方々から教えて頂きながら海外販売への模索中です。

柳瀬 翔

Sho yanase

10代の頃からお小遣い稼ぎに工場に入り浸り、紙漉きの現場、空気に触れてきました。学ぶ事は絶えず、試行錯誤の日々です。金型や道具を工夫し、「生活にとけ込む和紙」の製作を目指しています。